

魔法の宿題 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名: 太田 真揮

所属: 福井県立福井東特別支援学校

記録日: 28年 2月24日

キーワード: 病弱 社会生活 病状の回復 成果の実感と意欲向上(学習・体力・生活)

【対象児の情報】

- ・学年 中学部 3年
- ・障害名 高 IgD 症候群 (自己炎症性疾患)
- ・障害と困難の内容

○新薬投与前の生徒の病状

- ・感染症に弱く、重篤化する。
 - 常時、マスクを着用している。
 - 病状が重篤化すると、激しい関節痛や嘔吐症状が表れ、2週間から1カ月程度の入院が必要である。
- ・低身長である。
 - 身長が85cm (中学部1年時) で、手足も短い。
- ・慢性的な疲労感があり、身体のだるさを感じている。
 - 鉛筆で文字を書き続けたり、作業を続けたりすることが困難である。
 - 何もしていなくても常にだるさがある。
- ・重度の骨粗しょう症と筋力の低下がみられる。
 - 教科書を持ったまま音読をしたり、重い教材を持ち運んだりすることができない。
 - 転倒や軽い衝撃で骨折の恐れがある。また、歩行が困難で、常時電動車いすを利用している。



＜中学部1年生時の生徒A＞

○中学部1年生から新薬の治験投与を行い、中学部3年生4月の段階で以下のように病状が回復した。

- ・感染症に対する免疫力や回復力が向上した。
 - 感染症にかかる回数が大幅に減った。
 - 重篤化しても3日～7日程度の入院で回復するようになった。
- ・身長が伸びた。(身長 102.7cm)
 - 脚や腕の長さも伸びて、洗面台の利用や車いすの乗り降りを自分で行うことができるようになった。
- ・慢性的な疲労感や身体のだるさを感じにくくなった。
 - 生徒の発言:「普通の人には元気な時、こんなに身体が楽なんです。」
- ・骨粗しょう症の原因であったステロイド薬の投与が減った。
 - 骨折のリスクが軽減し、主治医より歩行訓練を重ねることで再び歩くことができるようになるだろうとの見解を得た。



＜中学部3年生時の生徒A＞

○困難の内容

身体的な病状が回復しても、自己を高めようとする意欲が見られないことが多くあった。

学習面…学習空白が大きく、自分の学習状況や習熟状況を客観的に理解できていない。「身体が疲れているからできない」「勉強の方法が分からない」など、学習に取り組む姿勢や意欲が乏しい。

身体面…骨折や歩行することへの恐怖感から、慣れた電動車いす生活から脱却できない。

生活面…「いつ寝たのか、起きたのか分からない」など、睡眠不足からくるだるさと病気によるだるさが混在し、遅刻や欠席が減らない。偏食があり、野菜の好き嫌いが減らない。

【活動目的】

・当初のねらい

- ①学習目標：学習空白を埋め、卒業後も学び続ける態度を養うため、一人で学習に取り組む知識・技能を身に付ける。
- ②体力向上目標：毎日、時間を決めて歩行訓練を行い、その成果を実感することで、継続的に体力を高めようとする意欲の向上を図る。
- ③健康生活目標：規則正しい生活が健康維持に影響を与えていることを理解し、生活を振り返りながらより良い生活習慣を意識することで、自分で健康管理しようとする意識を身に付ける。

・実施期間：平成27年4月15日～平成28年1月31日

・実施者：該当生徒担任・病弱肢体不自由部中学部教師・校内ICT推進グループ教師

・実施者と対象児の関係：担任・教科担当と生徒

【活動内容と対象児の変化】

①学習に関する取り組み

○対象児の事前の状況

・体力や手・腕の筋力が回復したにもかかわらず、学習に継続的に取り組む姿勢が十分に身に付いていなかった。

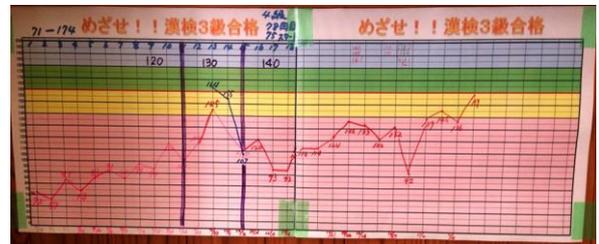
→自分の目標が曖昧で、最後まで学習に丁寧に取り組むことができなかった。

→学習の途中でだるさや疲労を訴え、継続的に学習に取り組めなかったり、宿題が分からないと途中であきらめて止めてしまったりすることが多かった。

○活動の具体的内容

・日本漢字能力検定を用いて、学習成果の数値化・グラフ化して教室に掲示した。

生徒Aは中学部1年生時から日本漢字能力検定（以下、漢検と表記）に取り組んできた。しかし、体力が向上したにもかかわらず、学習意欲や学習に取り組む姿勢が十分でなく、学習成果が十分に見られなかった。そこで、学習目標を明確にもつこと、学習した努力と成果の因果関係が視覚的に理解することができるように、模擬テストの結果を教室に掲示するようにした。



<教室に掲示した模擬テストのグラフ>

○対象児の事後の変化

漢検の模擬テスト結果をグラフ化して掲示することで、生徒Aは「勉強すればするほど、どんどん得点が上がりますね。」と話すなど、学習量と学力向上の関係に気付くことができた。また、家庭学習にきちんと取り組まなかったり、集中してテストに取り組まなかったりしたときには点数が大きく下がり、学習量や学習意欲と学習結果が結びついているという因果関係を理解することができた。

因果関係を実感したことで、生徒Aは毎日継続的に学習に取り組むようになった。6月に漢検4級に合格した後は、漢検3級や実用英語技能検定5級にもチャレンジす

学習でがんばって取り組んだこと

漢検を覚えるまでやめたこと。

毎日約5時間学習をした。

新しい学習方法をやってみた。

(暗記カード)

学習の成果



試験を受けて良い結果がでたと思う。

この方法をやってみて、大変にたげやばかったと

思う。

<学習振り返りカード>

ることを決めるなど、学習に対する意欲が高まった。

今年度、生徒Aは漢検3級・4級、英検5級に合格することができた。特に、中学校卒業程度の漢字習得という客観的学力指標である漢検3級に合格できたことは、1人の学級で中学部生活を送ってきた生徒Aにとって大きな自信につながった。

②体力向上に関する取り組み

○対象児の事前の状況

- ・昨年度、骨折した経験から歩行することへの恐怖心があった。生徒の発言：「歩くのがこわい。」
- ・電動車いすの操作に慣れており、歩行する必要性を感じていなかった。生徒の発言：「今日は疲れているので、歩かないようにします。」
- ・日常生活のほとんどの場面で、電動車いすを利用し、自ら歩こうとすることはなかった。

○活動の具体的内容

- ・毎日、歩行時間を決めて、歩行した距離を「ヘルスケア」アプリで記録した。

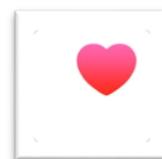
学校生活の中で、歩行する場面や時間を決めて、毎日継続的に歩行することを教師と約束した。4月当初に本人と相談しながら、「教室とトイレの往復」と「下校時に教室から玄関まで」を歩くことにした。また、1カ月ごとに振り返りシートを記入してもらい、教師と共に振り返りを行いながら目標を少しずつ高めるようにした。

- ・移動履歴アプリ「LIFE_NOTES」で歩行距離を記録した。

体育の教科担当教師と協力し、学校周辺を歩行する活動を行った。移動履歴アプリ「LIFE_NOTES」を用いて、生徒Aの歩行経路・距離・歩数・消費カロリーなどを記録した。その記録を基に、授業後、身体の様子や疲れ具合を聞くようにした。

- ・iPhoneの「カメラ」機能で、歩行の様子を記録し、比較した。

月毎に「カメラ」機能で、生徒の歩行の様子を動画撮影した。それらの動画を生徒と教師が話し合い、歩行の姿勢やスピードについて振り返りを行った。



<ヘルスケア>



<LIFE_NOTES>



<カメラ>

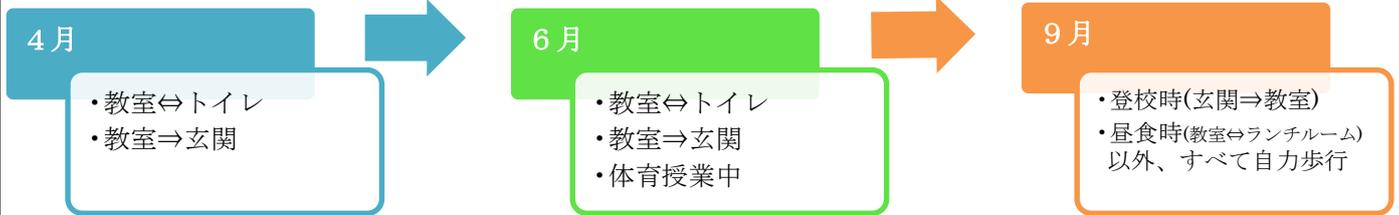


<「LIFE_NOTES」の記録> <4月 校外での歩行の様子> <比較した歩行動画 左：4月 右：9月>

○対象児の事後の変化

4月は教師と約束した「教室とトイレの往復」と「下校時に教室から玄関まで」を歩くのみであった。取り組みを続ける中で、少しずつ歩行に自信をもち、次図のように目標を高めることができた。

<歩行目標の変遷>



また、学校周辺の歩行と振り返りを繰り返し実施することで、生徒A自身も体力・筋力の向上を実感することができた。

長く歩いてもつかれなくなった
歩くスピードが速くなった。
<歩行後の生徒Aの振り返りシート>

さらに、月毎の歩行動画を並べて提示して、その変化を教師と共に話し合う中で、生徒Aも「身体を支える力が強くなった。しっかりとした姿勢で歩くことができるようになった。」と述べるなど、体力や体幹の筋力の向上を実感できていた。歩行することの良さを感じ、体力や筋力の向上を実感できたことで、日常生活における電動車いすの利用は大幅に減少した。自分の教室周辺の移動や体育の時間は、教師に促されなくても自主的に自力歩行で活動するようになった。



<10月:校外を歩行する様子>

③健康生活に関する取り組み

○対象児の事前の状況

- ・早寝早起きの習慣が身に付いておらず、自分の生活習慣の実態について理解できていなかった。
生徒の発言:「何時に寝て、何時に起きたのかははっきり覚えていない」
- ・早起きができないため、朝食をとらないまま登校したり、午前中の授業に集中できなかったりすることが多かった。
→上記のような理由から、遅刻して登校することが常態化していた。
→病気による身体の不調と不規則な生活習慣による不調とを混同している実態が多くみられた。
生徒の発言:「病気だから疲れている。朝起きられない。」

○活動の具体的内容

・「ヘルスケア」アプリで、睡眠・朝食の状況を記録し、教師の遅刻・欠席記録と比較検討を行った。
生徒Aが「ヘルスケア」アプリで、就寝時間・起床時間・朝食の有無の記録をとり、教師が毎日の遅刻・欠席と遅刻した場合には遅刻した時間を詳細に記録した。それらの記録を1週間ごとに振り返り、生活改善に向けて必要なことを話合った。

6月7日~8日	23:00 - 7:50 睡眠
6月8日~9日	23:00 - 7:30 睡眠
6月9日~10日	22:30 - 7:40 睡眠
6月10日~11日	22:20 - 7:30 睡眠
6月11日~12日	23:00 - 8:30 睡眠



8	月	遅刻 15分
9	火	遅刻 7分
10	水	○
11	木	○ 早退
12	金	遅刻 1時間

<生徒Aによる就寝記録>

<教師の出席記録>

- ・「カメラ」で給食の喫食状況を記録し、写真を提示しながら声掛けを行った。
教師が給食後の食器を「カメラ」機能で撮影し、喫食状況を1ヶ月ごとに比較した。(本校の給食は1ヶ月ごとにほぼ同じメニュー) 写真を提示しながら、前回よりも多く食べるように声掛けを行うとともに、少し

でも多く食べることができた時には大いに褒めた。

○対象児の事後の変化

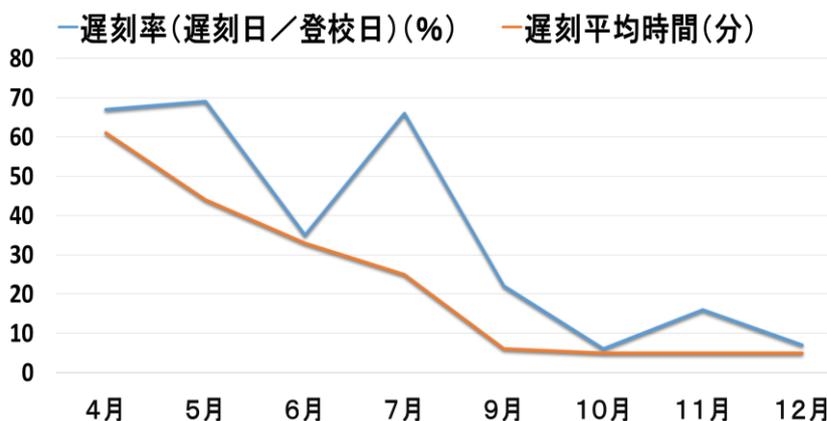
生徒Aと教師のそれぞれ記録をもとに、就寝・起床時間と欠席や遅刻の関連性について話し合ったところ、「早寝をすれば遅刻しない。夜11時よりも早く寝れば遅刻しないで済む。」ということに気づくことができた。

その後、自分自身で早寝早起きを意識して生活するようになり、iPhoneの目覚まし機能を自主的に活用するなど、自分で健康管理を行おうとする姿勢が身に付いた。

この取り組みを続ける中で、生徒Aの遅刻数・遅刻時間は大幅に減少した。右のグラフは、生徒Aの登校した際に遅刻した割合を青色で、遅刻1回あたりの平均時間を赤色で示したものである。遅刻率・遅刻時間共に減少傾向にあり、2学期以降はほとんど遅刻しなくなったことが分かる。3学期に入ってから現在まで、体調不良や寝坊などが原因の遅刻や欠席はなく、規則正しい生活習慣が定着した。

早寝、早起きも心がけている
iPhoneの目覚ましで起きている

<振り返りシート>



<遅刻率と遅刻時間の変遷>

給食指導では苦手なメニューに絞って、写真を提示しながら継続的に指導を行った。前回の喫食状況が分かる写真が提示されていることで生徒自身も、前回よりも多く食べようと意識することができた。

苦手なメニューに対しても少しずつ精神的な抵抗感がなくなり、月を追うごとに残す量は減少した。現在も好き嫌いをなくそうと意識して生活している。

苦手なご飯が出て前ほど苦ではなくなった。

<振り返りシート>



<残っていたチンゲン菜(1学期)>



<10月16日>



<11月13日>

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づきとエビデンス

・客観的・具体的データを視覚的に提示することで、生徒が努力と成果の因果関係を実感できる。

生徒Aのすべての取り組みで、客観的・具体的データの視覚的提示を行った。その結果、生徒自身が現状を自覚し、具体的な目標達成に向けて努力を重ねることができた。さらに、それぞれの目標を達成すること

で、生徒A自身が「～ができた」という具体的な達成感や自信を味わうことができた。このような達成感や自信は、自主的に取り組む姿勢や新しいことにチャレンジする姿勢につながった。

・客観的・具体的データを記録・提示する際に、ICT機器の利用は有効である。

持ち運びができる iPhone などの携帯情報端末は、指導者が必要と感じた際に、情報の記録や生徒への提示が可能であり、いつでもどこでも活用できる。今回の研究で、客観的・具体的データを記録するために、ICT機器の利用は非常に有効であると感じた。

・評価規準に「書字」を伴うもの、複数人数（3人以上）で情報を共有するものについては、ICT機器の利用に当たって簡易性・効率性を考察すべきである。

学力向上の取り組みの過程で、生徒の病状回復に応じて、適切な学習方法を模索した。ICT機器による学習とプリント学習を比較し、生徒の身体的負担と学力向上の効率性の観点から、生徒Aに適切な支援方法について考察した。

生徒Aは当初、漢字を選択するアプリで漢検の学習に取り組んでいた。しかし、そのような学習を一週間続けても、模擬テストの結果はほとんど変わらないままであった。原因として、漢検は評価規準に「書字」が含まれていること、また、教科担任が主として学習に関わる中で、担任・教科担当者・保護者・生徒本人など、複数（3者以上）で情報を共有することが難しかったことが挙げられる。

書字が可能になった生徒Aにとっては、プリントによるドリル学習と教室による掲示物が、ICT機器による支援よりも簡易的・効率的であった。

○その他エピソード(画像などを含めて)

他の特別支援学校中学部の生徒と交流した際に、生徒Aは「ぼくの得意なことは漢字です。漢検3級に合格しました。」と自信をもって周囲に発表することができた。また、交流先の生徒や教師から「漢検3級に合格できるなんてすごい。」と認めてもらえたことで、自分の努力や学習成果を実感できた。客観的学力指標である漢検に合格できたことは、生徒Aが今後社会に出ていくうえで、必要な学力と自信につながったと考える。

また、体力が向上し、歩行することへの恐怖感が減ったことで、体育大会のリレー競技やダンスに歩いて参加するなど、チャレンジ精神も育ってきた。日常生活の中でも、掃除や排せつなど、それまで教師の支援が必要だったことについても、一人でできるようになった。中学部入学時には室内に限定されていた行動範囲も、現在では他教室にいる下級生に休み時間に自ら会いに行き話をする様子が日常的に見られている。生徒Aがそれまで学校や教師が当たり前に行ってきた支援を行わなくても、自分の意思で自立していこうとする意欲や態度が芽生え始めている。

生徒Aは中学部卒業後、肢体不自由の特別支援学校高等部への進学が決まった。生徒Aと保護者は、個人のフェイスブックにて、「今までは病弱の特別支援学校で、病気に対してとても守られた環境でしたが、今度は肢体不自由の特別支援学校を選びました。薬のおかげで体調が安定したことが一番の理由ですが、学校行事や学校全体が元気で活発な雰囲気のある学校で、同じ悩みを共有できる友達と一緒に学び、成長したい。」と記



<漢検合格を、交流先で紹介する生徒A>



<一人で掃除機をかける>



<体育大会に歩いて参加>

している。本人・保護者共に、病気の回復を実感し、社会で自立した生活を送ることを目指して、新しい一歩を踏み出している。そのような生徒・保護者の意思を尊重し、高等部においても更なる成長につなげるために、今年度の取り組みを移行支援資料に記載し、生徒Aの実態に応じた支援方法について十分に情報共有を行う予定である。今後、病状が回復し、自立心が芽生え始めている生徒Aに対して、今までの支援や配慮をいかに減らしていくのか、社会に出ていくうえで新たにどのような支援や配慮が必要になってくるのか、生徒Aにとっての合理的配慮を十分に検討していく必要がある。